

幼児の行動認知に関する教師・保護者間の齟齬に関する研究

吉田 澄江*・武田 京子**・菅原 正和**・笹原 裕子*
加藤 和子*・加藤 良***・柿崎 明広****
(2003年3月20日受理)

Sumie YOSHIDA, Kyoko TAKEDA, Masakazu SUGAWARA and Yuko SASAHARA,
Kazuko KATOH, Ryou KATOH and Akihiro KAKIZAKI

Cognitive Discrepancies between Teachers and Parents on Child Behavior

I 問題

我が子のことをよく知っていたつもりでいた保護者が、実際は殆んど実態を把握していなかったという例は枚挙にいとまがない。附属幼稚園でも、園児の攻撃行動などが目に付くようになり、その状況を保護者に説明すると「家庭ではそのようなことはない」と言われることがよくある。幼児に限らず人は、場所や状況が変わるとそこで見せる自己像が全く異なってしまうということはよくあることで、幼児の示す家庭での姿と幼稚園での行動が違って当然といえる。しかし幼稚園内で示す不適応行動(例えば攻撃行動)が信じられない、受け入れ難いと感じそのままにしている場合はそこに教師・保護者間で齟齬が生じる。個々の幼児についての理解を深めながら保護者や家庭と連携して、思いやりの心を育てていきたいと願い、幼児の行動に関する認知齟齬について問題点を見出し検証して行くことにした。

本研究は、学部・附属校園・保護者が協力して、J. Bowlby (1980, 1988), M. D. S. Ainsworth (1991), I. Bretherton (1990) 等の Internal Working Model (IWM; 内的作業モデル) 理論を背景に、幼児の行動の発達変化とその認知齟齬を「思いやり行動」と「攻撃行動」から分析したものである。

II 方法

- (1) 幼児の思いやり行動
cf. 向社会的行動 (Prosocial Behavior) 愛他行動 (Altruistic Behavior)
- (2) 幼児の攻撃行動
cf. *HAQC (Hostility-Aggression Questionnaire for Children)
小学生対象

*岩手大学教育学部附属幼稚園
***岩手大学教育学部附属小学校

**岩手大学教育学部
****岩手大学教育学部附属養護学校

*BAQ (Buss-Perry Aggression Questionnaire)

(Capsi, A., et al., 1995 ; Einsenberg, N., et al., 2000)

(3) 幼児の I WM (Internal Working Model)

cf. [Cassidy, J. & Shover, P. R., 1999 ; Thompson, R. A., 1999 ;

Kochanska, G., 2001 ; Braungart-Ricker, J. M., et al., 2001.]

(1)(2)(3)の研究を基に新たに幼児用の「思いやり行動尺度」「攻撃行動尺度」「I WM」を作成し、幼稚園3, 4, 5歳児の担任と保護者, 小学校2年生の担任を対象に質問紙法による意識調査を行った。

Table 1

Questionnaire Checklists for the Prosocial Behavior Scales in Children.

	1	2	3	4	5	
1) 泣いている子をなぐさめる	(1	2	3	4	5)
2) わからなくて困っている子がいたら教えてあげる	(1	2	3	4	5)
3) 仲間に入れない子がいたらさそってあげる	(1	2	3	4	5)
4) 物をなくして困っている子がいたら一緒に捜す	(1	2	3	4	5)
5) お友達に親切でやさしい	(1	2	3	4	5)
6) けんかをしている仲間を見たら止めさせようとする	(1	2	3	4	5)
7) 順番を自分からゆずってあげる	(1	2	3	4	5)
8) 絵本やテレビを見ていてかわいそうになりもらい泣きする	(1	2	3	4	5)
9) お友達のために先生に援助を求める	(1	2	3	4	5)
10) 助け合ったり, 協力し合うことができる	(1	2	3	4	5)
11) 弱い子や小さい子のお世話をする	(1	2	3	4	5)
12) お友達のために心配してあげる	(1	2	3	4	5)

Table 2

Questionnaire Checklists for the Aggressive Behavior Scales in Children.

1) お友達をたたく	(1	2	3	4	5)
2) お友達を泣かせる	(1	2	3	4	5)
3) 噛みついたりする	(1	2	3	4	5)
4) 物を投げつける	(1	2	3	4	5)
5) ドアや物を蹴る	(1	2	3	4	5)
6) ひっかいたり, つねったりする	(1	2	3	4	5)

7) 動物や虫をいじめる	(1 2 3 4 5)
8) あばれたり, わめいたりする	(1 2 3 4 5)
9) 他の子のものをとりあげる	(1 2 3 4 5)
10) 独占したがる	(1 2 3 4 5)
11) 腹をたてて, ひどいことを言う	(1 2 3 4 5)
12) 教師につっかかる	(1 2 3 4 5)

Table 3

Questionnaire Checklists for the Scales of Internal Working Model (IWM) in Children

1) 必要に応じて教師を頼りにしながら, 安定して自分の活動を展開する	(1 2 3 4 5)
2) 自分が必要なときには教師に対してためらいなく率直に援助を求める	(1 2 3 4 5)
3) ちょっとした教師とのかわりに安心感を得て, また学習や遊びにもどる	(1 2 3 4 5)
4) 教師との親密な関係を持つが, 友達との遊びや回りの探索をする活動が多い	(1 2 3 4 5)
5) 遊びや活動の中で達成感や自信を持つ	(1 2 3 4 5)
6) 家の人を迎えに来たときは喜びを素直に表して甘える行動が見られる	(1 2 3 4 5)
7) しばしば教師に対して, 注意を引こうとしたり接触を求めたりする	(1 2 3 4 5)
8) わざと困らせるなど, あまり効果的でないやり方で教師の注意を引こうとする	(1 2 3 4 5)
9) 友達と関わることより, 教師の周りにいることを好む	(1 2 3 4 5)
10) 自分の要求や意志を素直に教師に伝える	(1 2 3 4 5)
11) してほしいことを言うより, 教師の近くで助けてくれることを待っている場合が多い	(1 2 3 4 5)
12) 迎えにきた母(父)親に接触を求めに行くが, たたいたり, キックすることがある	(1 2 3 4 5)
13) 突っついたり, 逃げたりするなど, 直接的ではないやり方で教師との接触を求める	(1 2 3 4 5)
14) 教師の助けが必要な時も, 屈折した形で助けを求めることがある	(1 2 3 4 5)
15) 教師との接触を求めるがひとたび教師が接近すると逆に拒否的な態度を示したりする	(1 2 3 4 5)
16) 情緒的に傷つきやすく, 感情が高まると部屋の隅などに行って人との接触を拒絶したりする	(1 2 3 4 5)
17) 友達との関わりを持ちつつ一緒に遊ぶことが苦手である	(1 2 3 4 5)
18) 不適切な方法で過度に友人の興味を引こうとする	(1 2 3 4 5)

III 結果と考察

教師が捉えた「思いやり行動」は小2で高い得点を示し、「攻撃行動」に関しては幼児の年齢が上がるにつれて得点が減少した (Fig.1)。保護者と教師間の比較において、「思いやり行動」については保護者より教師の方が多く認知する傾向が強く ($p < .05$)、この理由は、幼児が集団の中で生活していく際に、自分より弱い立場の子に対して思いやりを示す機会が家庭より多くなるためであると思われる。「攻撃行動」全体に関しては、保護者と教師で有意な差が見られないが ($p < .90$)、男女別の分析によると、保護者に比べ、教師は女兒に非攻撃的行動を認知している。これは教師が多数の男児・女兒入り混じった幼児に接しており、攻撃的で活発な男児と、そうでない幼児を自然に観察しながら活動しているのに比して、今日の保護者の多くは、我が子以外に客観的対象が核家族化して少なくなっているため、女兒の多少の攻撃的行動に対しても攻撃的に感じている ($p < .05$) 可能性がある。

年齢別の「思いやり行動」では、保護者の評定値が年齢が上がるにつれて得点も高くなっているのに対し、教師の3, 4歳児の得点が低くなっている。これは、教師が3, 4, 5歳児の発達を客観的に見て、それぞれの年齢に応じた成長のイメージがあり、それに近づけたいと考えやすいこと、また、4歳児は運動意欲が高まり、挑戦意欲や対抗意識が芽生える時期であるとともに、これまでよりも人とかかわりを望むようになるが、そのかかわりが未熟なためではないかと推測している。

年齢別の「攻撃行動」で、3歳児の教師の得点が高い理由は、初めての集団生活で、これまで家庭では現す必要のなかった攻撃行動を示すことになったからであろう。家庭ではある程度思い通りに行動させてくれたが、同年齢集団ではぶつかり合いになることが多いため攻撃行動が出現しやすくなる。

年齢別IWMでは、アンビバレント型が3歳児に多く見られ、3歳児の「攻撃行動」得点が高く出ることとかんれんしている。関係があると思われる。男女児間のIWMでは、男児にアンビバレント型が高く出現している (p<.003)。IWMと「思いやり行動」「攻撃行動」の相関係数から、アンビバレント型の幼児は教師の「攻撃行動」得点が明らかに高くなっている。

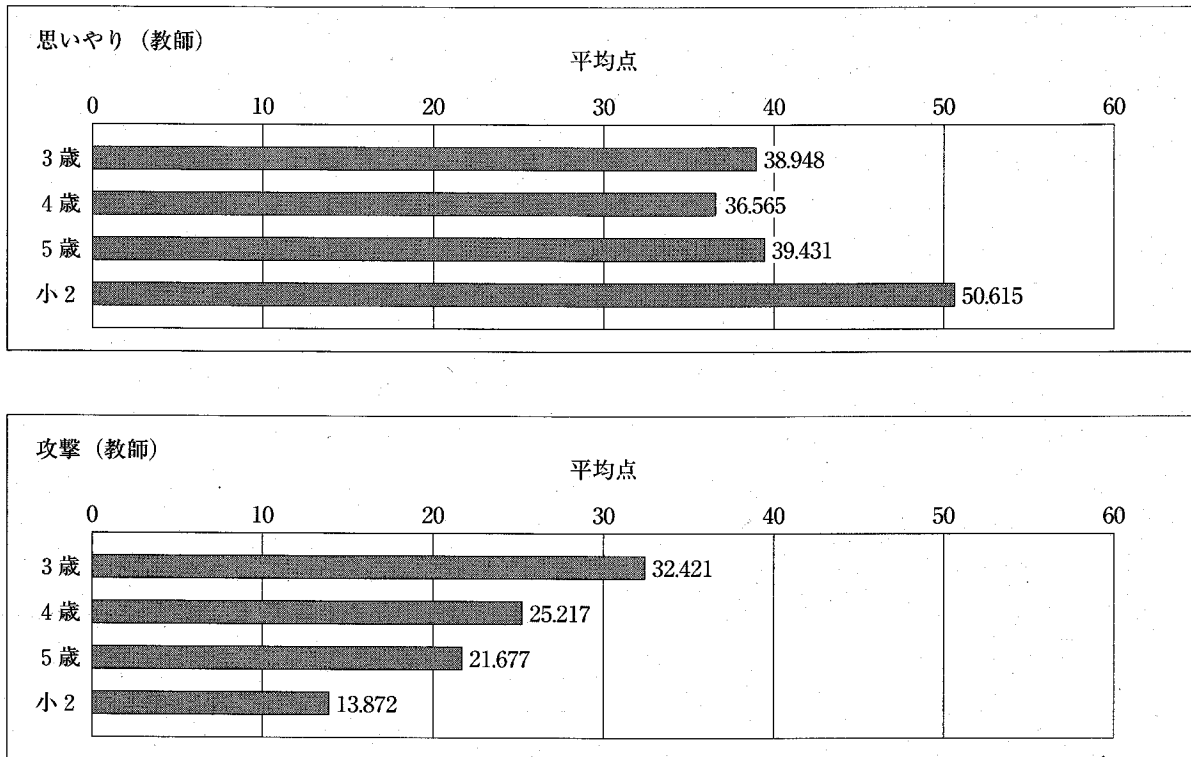


Fig.1

分散分析表：思いやり (教師)

	自由度	平方和	平均平方	F 値	p 値	ラムダ	検出力
CLASS	3	5,224.586	1,741.529	41.389	<.0001	124.166	1.000
残 差	207	8,710.020	42.077				

基本統計量：思いやり（教師）

効 果：C L A S S

	例 数	平均 値	標準偏差	標準誤差
2	39	50.615	5.403	.865
3	38	38.947	1.251	.203
4	69	36.565	7.995	.963
5	65	39.431	7.067	.877

Fisher の PLSD：思いやり（教師）

効 果：C L A S S

有意水準：5%

	平均値の差	棄却値	p 値	
2,3	11.668	2.915	<.0001	S
2,4	14.050	2.562	<.0001	S
2,5	11.185	2.590	<.0001	S
3,4	2.382	2.583	.0705	
3,5	-.483	2.611	.7155	
4,5	-2.866	2.210	.0113	S

IV 要約と今後の課題

- (1) 「思いやり行動」は3歳から小2に向かって発達的に増加する。
- (2) 「攻撃行動」は逆に、3歳から小2に向かって発達的に減少する。
- (3) 教師と保護者間の「思いやり行動」では、教師の方が全般に保護者より多く認知し、特に女児に対して差が大きい。
- (4) 教師と保護者間の「攻撃行動」認知では、保護者の方が教師より男女児差が少なく、教師は男児では高く、女児では保護者より低く感じている。しかし、3歳児に関しては、全般に教師が保護者より攻撃行動を高く認知している。
- (5) (3), (4)の差異は、少子化と地域における子どもの遊び環境の変化によって生じている可能性がある。密室育児と言われる、母親一人がすべてを背負い込み、または母親が自分の子どものみを基準にした思い込みを持ってしまい易いのが現代の子育て環境である。かつての幼児は地域の中でも集団を形成して遊ぶことが多かった。そこでは、攻撃行動の許容範囲を自然に遊びの中で学習し合い、思いやり行動も身に付く機会が多くあった。そして、周りには親以外の多様な価値観をもつ大人たちの存在があり、多様な集団に包まれて親は育児をしていたと思われる。
- (6) IWMのアンビバレント因子は「攻撃性」と極めて高い相関が見られ(.702)、「思いやり」とは逆相関を示す(-.245)。即ち、生活全般に親子の信頼関係を基盤とした安定が得られていないと、その欲求不満を園で行動化し、なんとか自分なりにバランスをとっているという姿が浮かび上がってくる。
- (7) 子ども達は状況や関係性によってそのあり様が変わり、当然家庭の中だけの狭い人間関係の中で

は、自分のあり様も限定されがちである。そこではその子の中にある一面のみが強調され、異なる側面には気付かないまま経過し、予期せぬ行動との遭遇にとまどい認知的齟齬が生じる。また、子どもも一面的な自己を求められ、苦しい状況に陥る。多様な対人関係を経験しないまま育つ現代日本の子ども達にとって、幼稚園は社会における初めての多様な人との出会いと、関わり合いを学習する絶好の場となる。そのことを保護者も理解し、園での姿、家庭での姿それぞれをその子そのものとして認めることが子どもの心の安定につながり、その中で自分以外のことも考えられる心のゆとりも生まれ、思いやりの心も育くまれると思われる。

- (8) このような実態を踏まえ、幼児の特性の理解と集団生活の大切さに関する学習会を企画している。また、幼児が多様な人とのかかわりを持ち、保護者、地域の方々と一緒に子どもを育てていけるよう、学部・附属学校・地域の人材を活用してのアシスタントティーチャー、チーム保育を計画している。

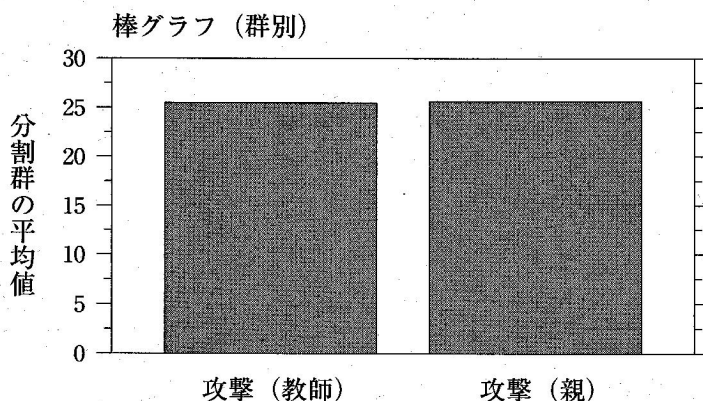
記述統計－連続変数

	平均	標準偏差	標準誤差	例数	最小値	最大値	欠測値の数
攻撃（教師）	25.471	11.704	.892	172	12.000	58.000	0
攻撃（親）	25.623	9.126	.717	162	12.000	60.000	10

t 検定（対応あり）

仮説平均値の差 = 0

	平均差	自由度	t 値	p 値
攻撃（教師），攻撃（親）	-.105	161	-.116	.9078



References

- 1) Bowlby, J. : Attachment and Loss : Vol. 3. Loss. Basic, New York, 1980.
- 2) Bowlby, J. : A secure base : Parent-child attachment and healthy human development. Loss : Vol. 3. Loss. Basic, New York, 1980.
- 3) Bretherton, I. : Communication patterns, internal working models, and the intergenerational transmission of attachment relationships. Infant Mental Health Journal, 1990, 11, 237-252.

- 4) Ainsworth, M. D. S. and Eichberg, C. G. : Effects on infant-mother attachment of mother's unresolved loss of an attachment figure or other traumatic experience. Routledge, New York, 1991.
- 5) Capsi, A. and Silva, P. A. : Temperamental qualities at age three predict personality trait in young adulthood. Child Development. 1995, 66, 486-498.

Appendix 1

記述統計 - 連続変数

分割変数：SEX

	平均	標準偏差	標準誤差	例数	最小値	最大値	欠測値の数
思いやり (教師), 合計	40.474	8.146	.561	211	13.000	60.000	0
思いやり (教師), 女	41.416	8.211	.817	101	13.000	60.000	0
思いやり (教師), 男	39.550	8.039	.770	109	17.000	60.000	0
思いやり (親), 合計	36.457	5.547	.436	162	13.000	50.000	49
思いやり (親), 女	36.584	5.688	.648	77	13.000	48.000	24
思いやり (親), 男	36.341	5.448	.591	85	20.000	50.000	24

合計結果は、分割変数の欠測値のため、個々のセルの合計と一致しません。

t 検定 (対応あり)

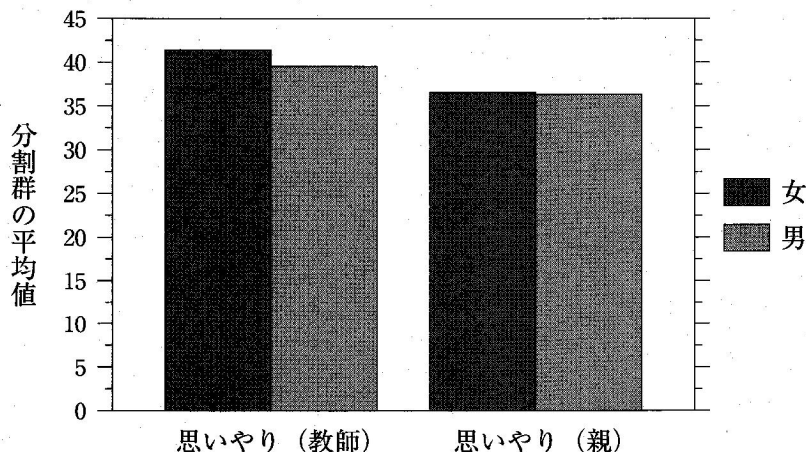
分割変数：SEX

仮説平均値の差 = 0

	平均差	自由度	t 値	p 値
思いやり (教師), 思いやり (親) : 合計	1.364	161	2.281	.0238
思いやり (教師), 思いやり (親) : 女	1.844	76	2.429	.0175
思いやり (教師), 思いやり (親) : 男	.929	84	1.021	.3104

合計結果は、分割変数の欠測値のため、個々のセルの合計と一致しません。

棒グラフ (群別) 分割変数：SEX



Appendix 2

記述統計－連続変数

分割変数：SEX

	平均	標準偏差	標準誤差	例数	最小値	最大値	欠測値の数
攻撃（教師），合計	23.327	11.723	.807	211	12.000	58.000	0
攻撃（教師），女	19.297	9.003	.896	101	12.000	44.000	0
攻撃（教師），男	27.147	12.707	1.217	109	12.000	58.000	0
攻撃（親），合計	25.623	9.126	.717	162	12.000	60.000	49
攻撃（親），女	23.338	8.008	.913	77	12.000	42.000	24
攻撃（親），男	27.694	9.618	1.043	85	12.000	60.000	24

合計結果は，分割変数の欠測値のため，個々のセルの合計と一致しません。

t 検定（対応あり）

分割変数：SEX

仮説平均値の差 = 0

	平均差	自由度	t 値	p 値
攻撃（教師），攻撃（親）：合計	-.105	161	-.116	.9078
攻撃（教師），攻撃（親）：女	-2.169	76	-2.022	.0467
攻撃（教師），攻撃（親）：男	1.765	84	1.262	.2106

合計結果は，分割変数の欠測値のため，個々のセルの合計と一致しません。

